

霊仙山と松尾寺の文化財



表写真：松尾寺旧境内から霊仙山を望む
裏写真：松尾寺九重塔（石造九重塔）【重要文化財】

目次

1．北近江の山岳寺院	1
2．信仰の対象となった霊仙山の地形	3
3．霊仙山をめぐる歴史	4
4．霊仙山をめぐる人々	5
1) 息長丹生真人一族	5
2) 霊仙三蔵	6
3) 法性坊尊意	7
5．山麓の湧水	8
6．松尾寺	11
《コラム》 戦国武将と松尾寺	13
1) 本堂跡	16
2) 本堂跡の発掘調査	17
3) 石造九重塔	20
4) 坊跡	22
5) 坊跡の発掘調査	23
6) 松尾寺の七不思議	24
7) 参詣道の丁石	25
8) 松尾寺の文化財	26
《コラム》 丹生谷のみどころ	28

本埋蔵文化財活用ブックレットは、米原市教育委員会と滋賀県教育委員会が協働して原稿を作成し、滋賀県教育委員会が国庫補助金（埋蔵文化財保存活用整備事業）を受けて刊行した。

1．北近江の山岳寺院

北近江を囲むようにそびえる大箕山・己高山・天吉寺山・伊吹山・霊仙山などいくつもの霊峰。人々は、古代より山々の恵みと、ときに禍にさらされながら、そこに神の存在を感じました。

山々に造営された菅山寺、鶏足寺、大吉寺、弥高寺、松尾寺など多くの古寺は、それぞれ異なる歴史背景をもち、独自の仏教文化を形成してきました。その一方で、『己高山縁起』には己高山・菅山寺・竹生島・大吉寺を「北四箇寺」と号したとあり、それぞれ山系は異なるものの、交流があったことがうかがわれます。

この冊子では、北近江の南端にそびえる霊仙山（1,083.5 m）と、その信仰の1つの拠点として栄えた松尾寺について紹介します。



菅山寺山門とケヤキの巨木

己高山

標高 923 m の己高山は、山容が美しく、己高山の名のとおり他の峰よりも突出して、霊山としての風格を漂わせています。山頂から山腹、山麓にかけて、己高山の山号を称する鶏足寺や石道寺、高尾寺など多くの寺坊が一大寺院群を形成していました。

奈良時代後期から平安時代にかけてのすぐれた仏像を多数残しています。

大箕山菅山寺

大箕山は、平安時代に菅原道真が中興した菅山寺があり、鎌倉時代にもっとも栄えました。



己高山 鶏足寺の六地藏



石道寺の旧境内



大吉寺跡の石造宝塔

大吉寺跡（県指定史跡）

天吉山の大吉寺は、平治の乱（1159）で源義朝（頼朝とも）をかまくったといわれている古刹で、鎌倉幕府の庇護を受け、室町時代には足利將軍の祈願寺となりました。

伊吹山

滋賀県の最高峰（1377 m）伊吹山は、古代の英雄ヤマトタケルを返り討ちにした「荒ぶる神」が棲む山として、古くから畏れ敬われてきました。山中から山麓には、平安時代に成立した伊吹山護国寺が發展・分立した弥高寺・太平寺・長尾寺・観音寺の4ヶ寺が造営され、伊吹大神を祀る山麓の伊夫岐神社や登拝道の起点・三之宮神社とともに伊吹山山岳信仰を支えました。



伊吹山遠景



弥高寺跡（史跡 京極氏遺跡）



長尾寺 旧本堂跡

2. 信仰の対象となった霊仙山の地形

霊仙山は鈴鹿山脈の北の端にあります。霊仙山には石灰岩地帯が広がっていて、そのために山中にはドリネ（くぼみ）やカレンフェルト（石塔原）などのカルスト地形が発達しています。山中にはこの窪みに水がたまって池になっているところがいくつかあり「お虎が池」「尼が池」「本池」「権現池」「龍神池」などと称されています。現在、登山道沿いに霊仙神社の鳥居が建つ「お池」もそのひとつです。これらの池は龍神信仰や雨乞い行事と深くかかわっていて、下丹生地区では、毎年10月に登拝が続けられています。

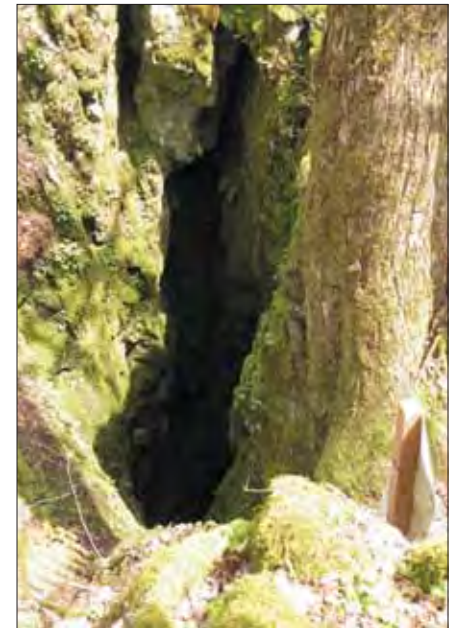
また、石灰岩地に浸透した雨水は、山麓各地に豊富な湧き水を供給します。さらに、山中には「河内の風穴」「継子穴」をはじめとする洞窟や、滝、巨岩・奇岩など霊場として崇められる行場が点在しています。



うらし
滝ヶ滝

〔米原市提供〕

滝は身を清める行場。かつて谷山谷入口には「お池白水の滝」という雌雄二条の滝もありました。



継子穴

〔米原市提供〕

洞窟は霊仙山の神仏の胎内で生まれかわるという擬死再生の行場でした。

3. 霊仙山をめぐる歴史

霊仙山には、白山を開いた泰澄が建立した大寺院「りょうぜん じ 霊山寺」が山頂に存在し、山麓には松尾寺を始めとする霊山寺の「七カ別院」があったと『興福寺官務牒疏』には記されています。しかし、『興福寺官務牒疏』は偽文書の可能性があり、山頂周辺で霊山寺にかかわる遺物や遺構などの発見もありません。また、七カ別院とされる観音寺・安養寺・大杉寺・仏性寺・莊嚴寺・男鬼寺・松尾寺も、松尾寺以外は、現在その跡地も定かではありません。

ただ、米原市上多良の木造薬師如来坐像（重要文化財・平安時代末期）や長浜市田勝寺の阿弥陀如来像はえんのぎょうじや 霊山寺の仏像であったと伝えられています。また、霊仙山とその周辺には、役行者をはじめ、法性坊尊意、仲算じゅうざんや浄蔵などの高僧の伝承や、継子穴や漆ヶ滝などには名もない修行者の伝説などが伝わっています。

幻の大寺院「りょうぜん じ 霊山寺」が存在したかどうかは明らかではありませんが、霊仙山が修験道と関係の深い山岳信仰の山であったことは紛れもない事実といえます。



霊仙山山頂付近の霊仙神社と「お池」

4. 霊仙山をめぐる人々

1) 息長丹生真人一族

霊仙山麓のしちかにゅう 下丹生古墳（米原市指定文化財）は、古墳時代後期（6世紀後半頃）の横穴式の石室がほぼ完全に残っていて、中に入って内部を観察することができる貴重な古墳です。古墳の被葬者は、豪族息長氏から分かれてこの地に進出した息長丹生真人一族の祖先と伝えられています。また、米原市枝折の醒井小学校周辺にあるさんだいじはいじ 三大寺廃寺からは、白鳳時代の瓦や建物基壇が発見されており、息長丹生真人一族の氏寺と考えられます。

天武天皇の時代、息長氏は天武八姓の第一位の「真人」姓を賜ります。「丹生」は、赤色の顔料である丹が産出する土地の地名で、この丹は古代に好んで用いられていました。奈良時代の『正倉院文書』には、息長丹生真人氏が多く登場します。この一族は奈良の都にいて、画工司の令史や画師、造東大寺司の画所領であったことが知られています。つまり、朝廷の画師集団として寺院の造営などにかかわっていたようです。



下丹生古墳石室

〔米原市提供〕

2) 靈仙三蔵

平安時代初期の高僧・靈仙三蔵は804年に遣唐使の一員として、唐の都長安に仏教求法のために入ります。このときの一行の中には、最澄や空海の姿もありました。その後、靈仙は卓越した才能によって唐の憲宗皇帝に認められ、「大乘本生心地觀經」の訳語の重責を果たしたことで「三蔵」の称号が贈られました。靈仙三蔵は、靈仙山麓の醒井付近の出身とされていますが、これは、昭和9年に高名な仏教学者の推測から始まったもので、現在のところ確実な資料はありません。



靈仙三蔵堂

3) 法性坊尊意

法性坊尊意(866～940)は、平安時代中期の天台宗の僧で、俗姓は息長丹生真人。一説に上丹生に生れたとされ、父母が子宝を願って祈ったという「子祈り山」や、法性坊跡の地名が残ります。比叡山で法学を修め、延長4年(926)には第13代天台座主になりました。平将門の乱の調伏に靈験があり、また、菅原道真との親交が厚かったと伝えられています。

能の演目『雷電』では、法性坊と道真の靈の対決が主題となっています。前段では、道真の怨靈が、雷と化し内裏であればれることを予告し、現世の師であった法性坊の参内をとどめますが、僧正は勅旨が来たら参内すると断ります。後段では、内裏のあちこちで鳴りまわる雷神の道真と、参内した法性坊の法力対決が行われ、最後に朝廷から「天神」の神号をおくられ、礼を述べて黒雲に乗り立ち去る道真の姿が演じられます。

また、上丹生にある「いぼとり水」は、尊意が生まれた時の産水であったとされる湧水です。イボ取りに効果があると伝えられています。



「いぼとり水」といぼとり地蔵

5. 山麓の湧水 - 仏縁結ぶ醒井の湧水 -

霊仙山は滋賀県の天野川・芹川・犬上川、岐阜県の牧田川・揖斐川水系の源として、水神信仰の聖地でした。山頂の「お池」は龍神が住む雨乞いの場でもありました。山麓の醒井地域に湧き出す清冽な泉は、この池から流れくると考えられ、丹生谷に生まれた高僧や、霊仙信仰に導かれた道行く僧が、神仏が坐す山・霊仙の胎内から湧き出る水を通じて、仏の縁を結んでいったとする伝承があります。

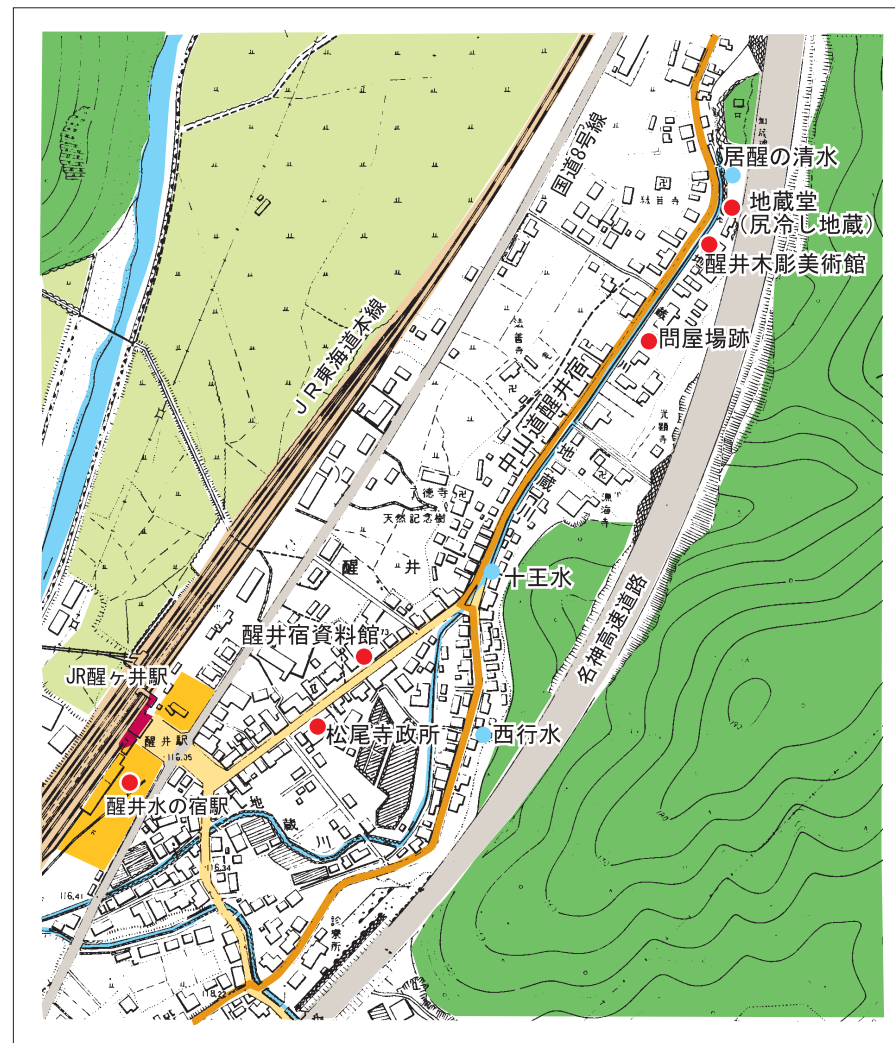
市内でもっとも賑やかな醒井の地蔵盆。涼やかな清流沿いにたくさんの作り物が飾られます。清流はその名も「地蔵川」。お堂の中には、高さ270cmのとても大きな石のお地蔵さんがまつられています。(石造地蔵菩薩半跏像／鎌倉時代／市指定文化財)。造られた当初、このお地蔵さんは地蔵川の中にあって「尻冷し地蔵」と呼ばれていました。これは、地蔵川を仲立ちとして地蔵尊と琵琶湖にすむ魚たちとの結縁を行おうとしたため、開眼供養には禅爾という高僧があたっています。いまは、霊仙山の神仏と子どもたちを結ぶ地蔵尊です。

また、こうした清らかな湧水に育まれた醒井は、『近江水の宝』に選定されています。



醒井の地蔵盆

〔米原市提供〕



中山道醒井宿の湧水マップ

西行水

「西行水」の別名は仲算結縁水です。仲算(生没年不詳)は、平安時代中期の法相宗の僧で、応和3年(963)の法華経講論では南都仏教(興福寺)側の代表として北嶺(延暦寺)天台宗の代表良源(元三大師)を屈服させるほど論争にすぐれた高僧でした。



延喜年間（901～923）、東国への旅の途中で醒井を通り、懐中の短剣で巖石の端を切ると清水たちまちほとばしったということです。いかなる干ばつにも涸れることはありません。

西行水（仲算結縁水）

じゅうおうすい
十王水

「十王水」は浄蔵結縁水とよばれます。浄蔵（891～964）は、平安時代中期の天台宗の僧で、平将門が関東で乱をおこすと、その調伏のための修法を行い霊験がありました。美声の声明で知られ、天文や医薬にも通じていました。諸国遍路の途中で、仲算が醒井で仏縁を結ぶため湧水を祈りだしたと聞き、浄蔵も巖石の下をくぼめこの水源を開きました。



十王水
中山道沿いの小川の奥より湧き出しています。近くに十王堂（閻魔大王などがまつられているお堂）があることから十王水と呼ばれています。

さめが い ななゆすい
醒井七湧水

醒井周辺に湧き出す「居醒の清水」、「十王水」、「西行水」、「天神水」、「いぼとり水」、「役の行者の斧割水」、「鍾乳水」の七つの清水は、醒井七湧水と呼ばれています。

6. 松尾寺

鈴鹿山地の北端にそびえる霊仙山（標高 1,083.5 m）は古くから聖なる山として、信仰されてきました。丹生川の谷間を隔て、霊仙山を一望することができる米原市松尾山（標高 504m）には、霊仙山と深いつながりをもつ普門山松尾寺があります。

松尾寺は現在、ふもと醒井養鱒場に隣接する松尾寺里坊へ拠点を移しましたが、急峻な山腹に造られたかつての境内地には、本堂跡や九重石塔、曼荼羅堂、坊跡などが広い範囲に残されています。

松尾寺は寺伝によると、天武天皇 9 年（680）にこの地で修行していた役行者が雲に載って飛来した聖観音像と十一面観音像を洞窟内に安置したことに始まるとされます。松尾寺の本尊は、この時飛来したとされる飛行観音です。元慶年間（877～885）には、伊吹山を中心として活躍した僧三修の弟子である松尾童子が堂宇を建立したと伝えられます。

中世には山伏が勢力を持つ有力な寺院であり、浅井三代の基礎を築いた浅井亮政や佐和山城にいた石田正継（石田三成の父親）など有力大名の庇護を受けました。



下丹生の集落より松尾寺山を望む
松尾寺の旧境内地は松尾寺山の山腹にあります。

江戸時代には、井伊家の庇護により、寺領 60 石が寄進され、寛文年間（1661～1672）に本堂が再建されました。



飛行観音の御前立 [松尾寺蔵]
本尊は秘仏「空中飛行観世音菩薩」です。空の安全を守る仏様として、航空業界の厚い信仰を集めています。



松尾寺の境内
本堂跡の周囲には、曼荼羅堂や鐘楼跡、鎌倉時代の石造九重塔（重要文化財）があります。



松尾寺旧境内地より霊仙山を望む

《コラム》 戦国武将と松尾寺

浅井亮政は京極氏の被官から台頭して戦国大名浅井氏の基礎を築きました。天文5年（1536）、松尾寺への寺領安堵状は、天文3年に北近江における地歩を確立して、小谷城清水谷の居館に京極高^{じりょうあん}清^{とじょう}親子を饗応した直後のものです。また、佐和山城にいた石田三成の父・正継が、松尾寺から60巻の書物を借用して、返却した内容の文書など、戦国武将の文書が伝えられています。



浅井亮政書状（天文五年 寺領安堵状） [松尾寺所蔵]



石田正継書状 [松尾寺所蔵]

松尾寺と周辺の文化財



国土地理院 2万5千分の1地形図「彦根東部」を下図として使用

1) 本堂跡

松尾寺の本堂は、境内の北西に位置する広い平坦地にありました。現在、そこでは本堂跡や曼荼羅堂、石造九重塔、鐘楼跡などを見ることができます。本堂は、昭和56年冬、湖北地域を襲った豪雪により倒壊したのです。

写真は、かつての本堂の姿です。この建物は寛文年間（1661～1672）に再建された桁行三間、梁間三間の入母屋造で、正面に一間の向拝が付き、背面を除く三方に広縁を持つ建物でした。

現在、本堂は収蔵庫とともに、ふもとの霊仙三蔵堂近くの場所に30年ぶり（平成23年竣工予定）に再建されつつあります。



在りし日の本堂の姿

〔松尾寺所蔵〕



本堂跡

東西13m、南北15mを測る本堂跡には、自然石を荒割した礎石が整然と並んでいます。

〔米原市教育委員会提供〕

2) 本堂跡の発掘調査

松尾寺旧境内では、史跡として保護・活用を図るため、平成3年度～10年度まで、米原町教育委員会によって、寺院の創建時期や寺域を確認する発掘調査が行われました。

本堂跡の発掘調査では、基壇中央から多数の埋納品がみつかりました。これらは、銅椀や鉄皿、瀬戸美濃陶器皿などがあり、本堂を再建した際に埋められた地鎮具とみられます。

また、本堂の周辺からは平安時代前期から近代までの遺物が出土しました。特に、9世紀後半頃の灰釉陶器椀や緑釉陶器の香炉蓋などは、松尾寺の創建時期を示す資料といえます。



本堂跡で見つかった地鎮具（銅椀）



緑釉香炉蓋

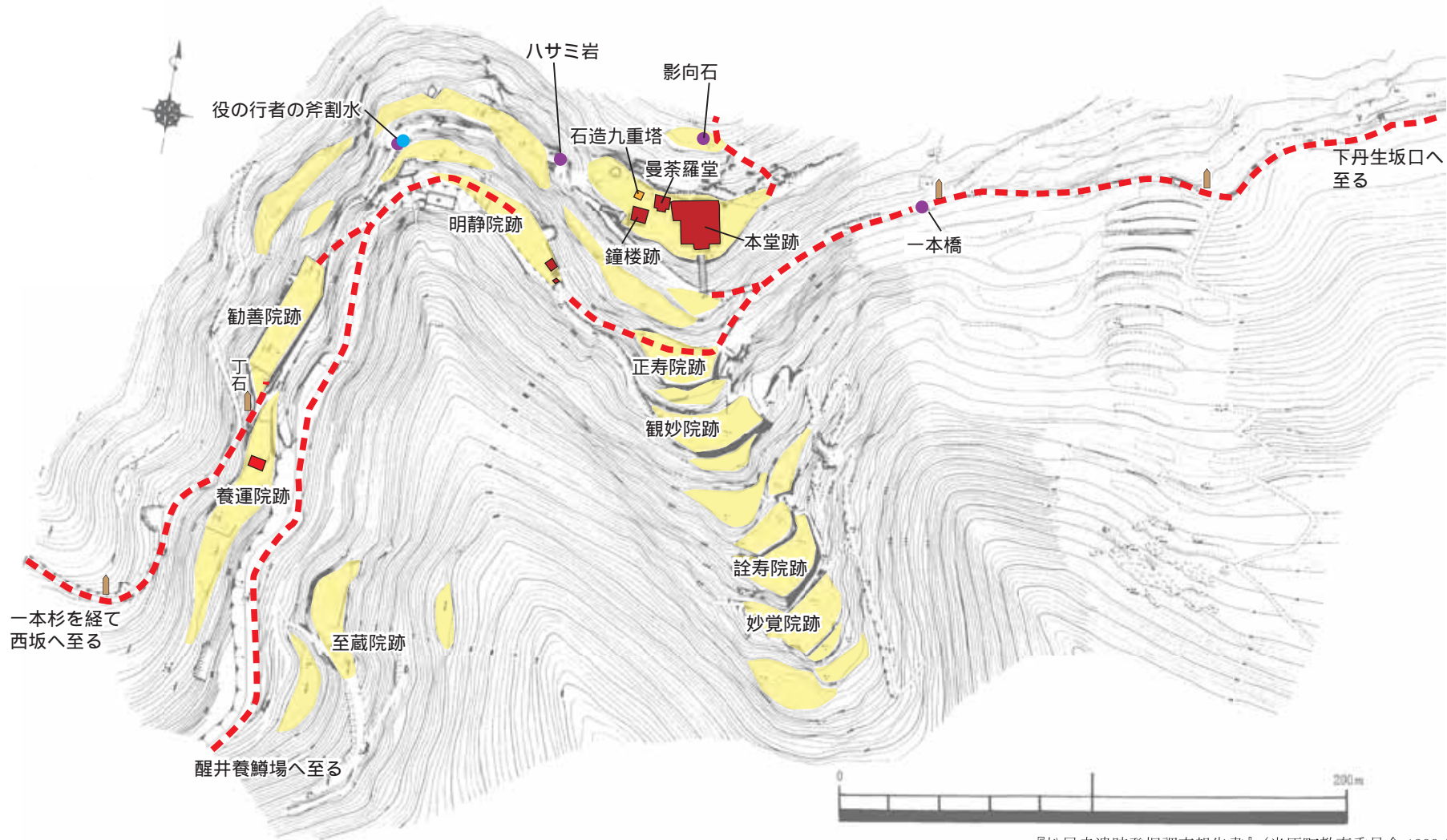


地鎮具 銅椀の中にはイネ粃が入られていました。

〔写真は3点とも米原市教育委員会提供〕

松尾寺旧境内図

▬ : 丁石
● : 松尾寺七不思議



『松尾寺遺跡発掘調査報告書』(米原町教育委員会 1999 年)の松尾寺遺跡地形測量図に一部加筆して使用。

3) 石造九重塔



松尾寺九重塔（石造九重塔）【重要文化財】 文永七年（1270）建立

文永7年（1270）に建立された松尾寺の石造九重塔（重要文化財）は、基礎から相輪部まで当初部材が残っており、高さ5.11mを測ります。その均整の取れた姿から、近江を代表する石塔の1つといえます。

基礎には、裏面を除く三面の格狭間の両側に宝瓶に活けた蓮が彫られています。三茎の蓮は中世の近江石造物を代表するモチーフですが、松尾寺の石塔はその最古の例の1つです。また、相輪上部には四方仏がみられますが、珍しい特徴といえます。

松尾寺山の北麓にある八坂神社にも元享3年（1323）に建立された九重石塔（市指定文化財）が残されており、松尾寺との関係が指摘されます。



八坂神社九重塔（米原市三吉）
【市指定文化財】



松尾寺九重塔 基礎と初層塔身
初重の軸石には肉厚な四方仏が刻まれています。
基礎の両側に刻まれた宝瓶の蓮は、四方仏への供花を意味しています。

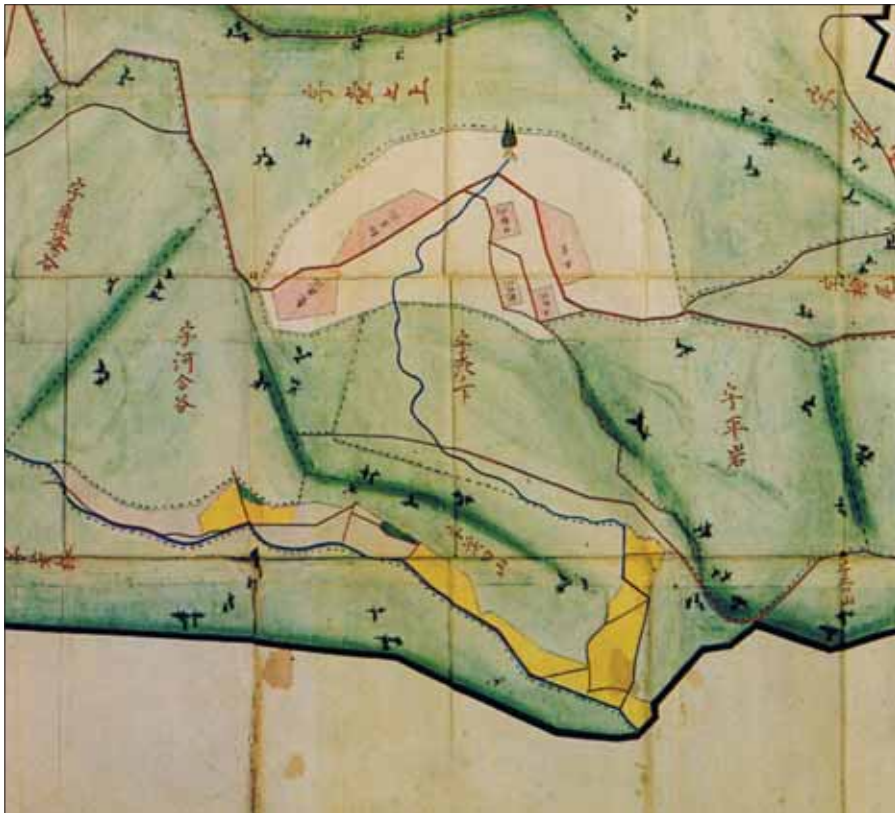


同塔 基礎裏面の銘文
格狭間の横（他の面では蓮が刻まれている部分）には、建立者の名前とともに、建立年月の「文永七庚午八月日」の文字が刻まれています。

4) 坊跡

松尾寺では、中心となる堂塔の周囲に僧侶達が日常生活をおくる坊（子院）が造られました。記録によると、慶長7年（1602）には19坊、安政4年（1857）段階で25坊あったことが知られています。

松尾寺は、境内地の最も高い場所に本堂や塔堂（松尾寺本体）があり、その西側斜面と南側へ伸びる尾根上に坊跡の平坦地が広がっています。こうした坊跡は、明静院・勸善院・養運院・律院・正寿院・詮寿院・妙覚院などの名前が伝わっています。



松尾寺村地籍図 明治6年 [米原市所蔵]
中央の桃色に塗られた部分に松尾寺の本堂や勸善院などの坊名が記されています。

5) 坊跡の発掘調査

本堂跡の南にある急な石段を下ると、眼下の尾根に段々畑のような平坦地が現れます。これらがかつて、56坊もあったとされる松尾寺の坊院跡の一部です。この付近には、正寿院や観妙院、詮寿院などの坊がありました。この地区の発掘調査では、江戸時代の坊の姿が明らかになりました。

詮寿院跡の調査では、坊舎や表門、石畳や飛び石の道などがみつかりました。坊舎は、入口側に広い土間をもち、奥に畳40畳ほどの座敷とみられる空間がありました。土間には、カマドやモミなどを脱穀する道具が設けられており、厨房や農作業場として使われていたとみられます。



[写真は2点とも米原市教育委員会提供]

門跡からみた詮寿院跡の石畳



坊舎の土間（詮寿院跡）

6) 松尾寺の七不思議

松尾寺には、古くから7つの不思議なことがらが伝わっています。それらは、①飛行観音、②影向石、③役の行者の斧割り水、④鐘イリ場、⑤一本橋、⑥ハサミ石、⑦夫婦杉です。その中から3つの逸話を紹介しましょう。

えん きょうじや よきわりみず 役の行者の斧割り水

役行者が修行中、水を求めて弟子に斧で岩を割らせてたところ、こんこんと水が湧き出したと伝えられます。

霊仙三蔵堂から登る見学コースの明静院跡に水汲み場が設けられています。



役の行者の斧割り水



一本橋

ハサミ石

本堂西側の石段を下りると、石灰岩の大岩が両側にせり出し、道が急に狭くなっています。ここはハサミ石と呼ばれており、松尾寺で悪いことをすると、岩に挟まれると伝えられています。

古代の山岳信仰の霊場であったかつての姿を彷彿とさせる景観です。



ハサミ石

7) 参詣道の丁石

丁石は寺院の参詣道に建てられた距離を示す石柱です。

松尾寺では、下丹生の坂口から登る参詣道と、西麓にある西坂からの参詣道に建てられています。ともに麓の参詣口を起点としています。

下丹生からの丁石は、中世的なもの（板碑形・5基残存）と近代のもの（花崗岩製の方柱・12基完存）の2種類が存在しています。近代のものは梵字と丁数が深く刻まれており、一本橋のたもとに最終の十二丁石があります。

一方、西坂からの丁石は、中世末～近世初頭頃のものともみられ、板碑形（上部が三角形）です。勧善院跡の門前のものが最終となります。



坂口参詣道の丁石

西坂参詣道の丁石と石仏

西坂からの参詣道の丁石にも梵字と丁数が刻まれています。坂口側の古い丁石と同様に、彫りが浅く、風化が進んでいます。石材には石灰岩が多く使われています。



8) 松尾寺の文化財



木造聖観音菩薩立像
(市指定文化財)
平安時代／像高 46.0cm
檜の一木造で、衣文は裳の折り返しが大きく、正面に渦文くずれを刻む11世紀の作風を示しています。火災にあったようで、顔面の粉溜塗りが厚く、当初の顔とは異なった感じになっています。

〔松尾寺所蔵〕



松尾寺のプロペラ

これは全長 277.0cm の木製のプロペラで、昭和 10 年（1935）4 月に、航空安全祈願の本尊である秘仏「飛行観音」の開帳を記念して各務原飛行学校から奉納されたものです。

〔松尾寺所蔵〕



鱧口（重要文化財）
鎌倉時代／面径 33.5cm

神社や寺院の軒下に架けて紐で打ち、参詣人が鳴らすものです。銘文によると弘安 6 年（1283）に鑄造されたもので、もとは尾張国海西郡三腰（愛知県愛西市見越町）の極楽寺にあったものです。尾張鑄物師の作品として注目されます。

〔松尾寺所蔵〕



絹本着色観経変相図
(県指定文化財)
南北朝時代／本紙縦 302.5cm × 横 234.7cm

阿弥陀如来を中心とする極楽浄土の世界を描いたものです。観経変相図としては滋賀県内最大の大きさを誇る堂々たるものです。

〔松尾寺所蔵〕

《コラム》丹生谷のみどころ

醒井峡谷と醒井養鱒場

霊仙山麓の鍾乳洞を水源とする宗谷川は、豊かな水量と清浄な水質を誇ります。その水は醒井七湧水の1つ「鍾乳水」と呼ばれています。また、宗谷川によって形成された醒井峡谷は、風光明媚な景観から名勝に指定されています。

醒井養鱒場は明治11年に琵琶湖固有種である「ピワマス」の増殖をはかるため、マスの孵化場として、醒井溪谷に造られました。現在もニジマスやアマゴ・イwanaなどの養殖が行われています。



醒井養鱒場



上丹生の彫刻家による作品
〔醒井木彫美術館所蔵〕

木彫の里

現在、上丹生地区は木彫の里として知られています。これは、文化年間（19世紀初頭）に上田長蔵・勇助兄弟が京都に上って、彫刻師について技を磨き、帰郷して霊仙山の良質の木材を活かして、社寺堂塔用彫刻・仏壇彫刻・欄間など、京都仕込みの装飾性の高い作品を生産し、現在の地場産業としての基礎を築かれたといえます。まさに、古代、寺院造営の画師集団として中央で活躍した息長丹生真人一族の伝統が、木彫という手法・作品にかわりながらも、現在でも脈々と受け継がれているように思えます。



国土地理院発行の5万分の1地形図「彦根東部」を下図に使用

霊仙山▲

行き方：松尾寺にはJR東海道本線「醒ヶ井駅」下車、醒井養鱒場行きバスで、「坂口バス停」または、終点「醒井養鱒場」下車、徒歩約1時間。

注意：丁石などの文化財や植物を大切にしましょう。
松尾寺旧境内や周辺の山々の多くは私有地です。出されたゴミは持ち帰りましょう。また、山中にはトイレはありません。
見学道は、倒木などにより、通りにくくなっている場所があります。また、松尾寺のある鈴鹿山地には、シカ、サルなどの野生動物が生息しております。見学には十分注意してください。

埋蔵文化財活用ブックレット2（近江の山寺2） 霊仙山と松尾寺の文化財

刊行：平成22年10月31日
編集：滋賀県教育委員会・米原市教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674 FAX：077(528)4956
e-mail：ma07@pref.shiga.lg.jp

印刷：共栄印刷株式会社